

# 令和5年度 外国語活動・外国語科 研究のまとめ

榎原 朱梨・森澤 葉子・伊藤 美絵

## 1. 研究会等で明らかになった教科等の資質能力の具体

### (1) 小学校外国語活動 「This is my favorite place.」

資質能力	児童・生徒の姿	具体的な手立て	キーワード
授業 構想力	○1 時間を通してどの児童も積極的に英語を使う姿が見られた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>多様な活動形態で発話を促すことで、英語での発話の量と質の向上に繋がった。</li> <li>身体表現を伴った歌などを適宜取り入れた。</li> </ul>	活動形態の工夫 興味関心 教具の工夫
	○本単元のターゲットセンテンスだけでなく、既習事項を用いてその場で質問を考え、やりとりする姿が見られた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>言語活動の目的や本時のめあてに立ち返ることで、児童の思考を促し、次の活動への必要性を引き出した。</li> <li>教科横断的な内容など児童の答えたくなるような例を用い、デモンストレーションを行った。</li> <li>既習事項を想起できるような教室環境作りを行った。</li> </ul>	思考の深まりへの支援 環境設定
授業 実践力	○発音や表現の訂正を行ったり表現を引き出したりするなど、コミュニケーションをよりよくするために教え合う姿が見られた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>暗示的な誤り訂正だけでなく、明示的な誤り訂正を取り入れた。</li> <li>コミュニケーションの良いところを児童自身で見つける活動を行うことで、児童同士で教え合うなどのコミュニケーションの質の向上につながった。</li> </ul>	協働的な学びへの支援 意見の共有
授業 分析・ 評価力	○振り返りから本単元で学習する表現に留まらず、既習事項を活用しやりとりする良さに気づき、よりレベルアップしていきたいという気持ちを持っていた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業後にアンケートを実施し、単元の振り返りを行った。</li> </ul>	具体的な振り返り

(2) 中学校外国語科「Think Globally Act Locally」

資質能力	児童・生徒の姿	手立て	キーワード
授業 構想力	○視点を持って話し合いを進める姿が見られた。一方で、グループによっては協働的な学びをするために必要な視点の共有が不十分なところもあった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・伝えたい思いを大切にするために、テーマから自分たちで考えさせた。</li> <li>・ALT や他のグループから意見をもらい、よりよい動画が作れるように対話的な学びを中心に行った。</li> </ul>	興味関心 思考の深まりへの支援 協働的な学びへの支援
	○それぞれの平和感を融合させ、伝えたいことを話し合う姿が見られた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人思考から集団思考させることで、それぞれの平和感を知った上で伝えたい内容を考えさせた。</li> </ul>	協働的な学びへの支援
授業 実践力	○既習表現を使って表現できるように試行錯誤する姿が見られた。グループを超えて協働的に学びあう姿が見られた。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・簡単な日本語に変換することで、自分の言葉で表現するように指導した。</li> <li>・言いたかったけど言えなかった表現を全体でシェアすることで、アイデアを共有した。</li> </ul>	表現の工夫
授業 分析・ 評価力	○振り返りから、本当に伝えたいことを伝えるために必要な英語表現を学びたいという思いを抱き、英語学習の意欲向上へつながった。また、アメリカでの平和教育にも興味をもち、国際人になるための1つのステップとなった。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本単元の自身の振り返りにとどまらず、異文化理解やオーセンティックなコミュニケーションを通して学べることに気づける振り返りを行った。</li> </ul>	具体的な振り返り

2. 研究についての考察

今年度の研究を通して、外国語科本来の魅力に迫るための教師の資質能力を表1に示すように、再検討した。なお、下線部は新たに加筆したものである。

表1 外国語科本来の魅力に迫るための教師の資質能力

資質能力	教科等が考える「教師の資質能力」の具体
授業構想力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科横断的な内容など児童や生徒の興味や関心を引き出すような目標の設定</li> <li>・児童や生徒の実態に合わせ、コミュニケーションの目的・場面・状況を意識した言語活動の設定</li> <li>・英語表現の定着に向けて、児童や生徒が異なる場面や機能で既習事項を活用する場 の設定</li> <li>・児童や生徒同士が協同的に学び合うことができるような場の設定</li> </ul>
授業実践力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童や生徒の実態を考慮した英語使用</li> <li>・英語を用いてコミュニケーションを図るロールモデルとしての立ち振る舞い</li> <li>・安心してコミュニケーションを図ることができる雰囲気づくり</li> <li>・児童や生徒の発話を引き出すような英語での問いかけ</li> <li>・効果的な誤り訂正</li> </ul>
授業分析・ 評価力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・児童や生徒の授業中の姿や振り返り等に基づく省察や授業の改善</li> <li>・ルーブリックや振り返り等に基づいた形成的評価の実施</li> </ul>

以上のことから、本研究を通じた成果と課題を以下のようにまとめた。

成果	課題
<p>○授業実践力の一つである効果的な誤り訂正を教師が行うことで、児童や生徒同士で発音や表現の訂正を行ったり表現を引き出したりするなどの、よりよくするために学びあう姿に繋がること示唆された。</p> <p>○児童や生徒の既習事項を活用して相手から表現を引き出したり、表現を試行錯誤したりする姿から、既習事項を活用することができる場を教師が意図的に設定することや、児童・生徒の困り感に対し、思考する場を設定するといった授業構想力や授業実践力の具体が明らかになった。</p> <p>○また、教師が授業構想力・授業実践力を働かせることで、児童生徒の伝えたいことを伝えられるようになりたいという英語学習への意欲向上につながると分かった。</p>	<p>○適切な英語を用いて表現したい内容を英語で伝える力がまだ十分に身につけているとは言えない。既習事項を活用し、児童や生徒が表現したい内容を表現することができるようにするための教師の具体的な手立て等について、引き続き検討が必要である。</p>